

近畿地方の万葉集と風景画シリーズ（第三十六回）

「八^や釣^{つり}の^の里^{さと}」（奈良県・明日香村大字八釣）

「八釣の里」は明日香村の中心地「飛鳥寺」から約四キロ離れた東の高台にある集落でここには万葉集に次の歌が詠われる

1) 八釣川 水底絶えず 行く水の 継^つぎて
そ恋ふる この年ころを

人麻呂歌集（卷十二―二八六〇）

（解説）八釣川の水底を絶えず流れてゆく水のように絶えることなくずっと心の奥底で恋い慕っている、この何年間を。

○八釣川は奈良県中部に位置する桜井市にある多武峰（標高678m）に発し八釣山の裾を流れ明日香村飛鳥で北折し大和川水系である米川に流れ込む小川で現在、「中の川」と呼ばれる。

2) 八釣山木立も見えず降りまがふ雪に

騒^{さわ}ける 朝^{あした}楽^らしも

人麻呂歌集（卷三―二六二）

（解説）矢釣山の木立も見えないほど降り乱れる雪に出仕の人のにぎわいでいる朝は、楽しいことだ。

○矢釣山は奈良県明日香村八釣付近の山のことと言われる。

○この歌の題詞は柿本人麻呂が新田部皇子にいたべおうじにたてまつ 献にいたべおうじれる長歌の反歌である。このことから新田部皇子の邸宅がこの辺りでないかと思われる説がある。今まで新田部皇子宮との関連は不明であるが八釣集落西側で身分の高い人物の邸宅である大型建物跡が見つかっている。にいたべおうじ 新田部皇子は天武天皇（第四十代天皇）の第十皇子。
（参考文献） 中西進編「柿本人麻呂」新潮日本古典集成「万葉集一」等
（写生地） 八釣山の麓から八釣の里と里の西側奥に甘櫛丘、遠景に壮大な葛城山連峰を描く。（池田杏花）

